

言語表現過程における情動反応

中 村 恵 一

一 序 論

モレノが提唱したソシオメトリーは、集団内の対人関係を土台にして、人間関係の究明と改善を試みたものであった。他人に対する好き嫌いが、社会集団の中で人々の示す最も基本的な対人態度であり、その方向が、好意的であろうと非好意的であろうと、感情的な要因が社会的な相互作用の根底にあるものだということは、否定しえない事実である。一方、様々な社会的な動機、金銭的な欲望や、知的な好奇心、あるいはイデオロギー的に裏づけられた関心などが、外面的な行動となってあらわれる際には、多少とも情動的な賦活性を前提としている。感情・情動は、個々の具体的な行動に、独特の色どりを

与えており、社会的行動を考える場合、この情動的な面を素通りすることはむずかしい。

発生的にみるならば、情動と外面的な行動とは一層混沌としている。赤ん坊の泣き声は何ら情動性を持つものではなく、後にそれを獲得するものなのかも知れないが、周囲のおとなの耳には、ある情動的なひびきをもつものとして受け取られる。コミュニケーションの情動性が極めて原始的な起源をもっていることについて、系統発生的に指摘したのはダーウィン⁽¹⁾であった。彼は人間の様々な顔面表情の中に動物のそれとの共通性を見出した。彼の指摘する通り、人間の表情の中には、本能的行動とのつながりも認められようが、最近の研究⁽²⁾によると、サル同志の間の顔面表情の伝達能力でさえも、決して生得的

なものではなく、サル社会の中で社会的に学習される性質のものであることが示されている。

われわれはこわくなると身体がふるえるというように、情動体験は一般に身体反応を伴っている。ジェームズは、この情動における身体反応の役割を強調した⁽³⁾。だがわれわれは、激しく怒ったときにも、こわいときにも一様に身体がふるえる。ふるえるという身体反応だけでは情動の性質を見分けられない。ジェームズの後にあらわれたキャノンの中枢説は身体反応に対して脳の活動を重視した。今日では人間の脳のある部分に微弱な電流を通ずると、快感が生じたり⁽⁴⁾、不安感が生じたりすることや、不愉快な事態に陥いると、脳波にθ波のあらわれることが、明らかに⁽⁵⁾なっている。身体反応や脳の電気的活動の測定は情動の研究にとってきわめて重要な役割を演ずるようになった。

一方、身体的生理的反應の重要性は、人間を意識と無意識の構成体と考える立場からも結果的に高められることになった。フロイトが無意識について語ったことは、部分的にバゾフなどの条件反射研究の中に、具体化されてきた。意識しない動機をもち、しかもそれが重要で

ある以上、報告されること以外からも、われわれは手がかりを求めねばならない。嘘発見に用いられる皮膚電気反射 (Galvanic Skin Reflex = GSR) によって人々の心の奥にひそむコンプレックスをひき出そうとしたスキスの連想実験などは古典的研究の一つである。現代社会ではテレビを見ているときや、人と相談しているときなど、日常生活における感情・情動についても、その人の身体反応や生理的反應を知ることが重視されるようになり、これらの反応は、限られた精神生理学の指標ということから払がって、社会行動の一つの指標としてみなおされるようになるわけである⁽⁶⁾。

われわれが、日常観察することは、感情やその表現の仕方は人さまざまということである。ある人はいつも悲しそうであり、ある人は表情の変化がいつも大げさであったりする。しかしこの多様性は、文化的差異、民族的相違にも連なる。顔面表情についての交差文化的な実験が試みられたり、情動反応の国際的な比較が行なわれる⁽⁷⁾のも比較的一般性が信じられている心理過程の中で、この方面については、そのまま外国の結果を無条件にひきうつしできない要素を含んでいるためであろう。

また逆に普遍的な問題として考えなおすならば、日本の科学者が取り上げて、外国の人々に大いに示唆を与えうるのも、この領域に可能性が大きいのではないかと考えられる。本学において社会心理学実験室を開設するにあたり、研究室の共通テーマとして、感情・情動の問題を取り上げた一つの背景である。

われわれの身体的な反応そのものが、すでに社会的な産物であつて、時代や文化の影響を受けることは当然であるが、一面身体反応は、発生的な連続性を多くもっているところである。これに対し、人間のコミュニケーションに、真に非連続的な性質を持ち込んだものを指摘するならば、それはことばの発生であつて、この働きによって人間のコミュニケーション活動は、独特の性質を持つことになつた。ことばによる自分の感情の表現は、意図的・意識的であつて、思わず表われる表出とは、一面かなり性質を異にしている。だが、くわしくみるならば、ここにも二面性があり、表現する人が意識せずに伝えてしまう面と、伝えようとして伝えられる面とが区別される。意図的な表現として、ある意味で典型的なものは、演技としての表現の場合である。演技する人が舞台上で

わす表現と、日常生活の表現とは、舞台が想定された状況にあるという点で、明らかに異質のものであるが、一面では共通性をも有している。何故ならば、感情は表現することによって高まるものであり、(例えば、腹をたてた人は、自分が怒りを表わすことの中で、いかに自分の怒りが正当なものであるかについて自分を説得し、聞く人にもまたそれを強制する上に、その様な怒りの表現に伴なう、自分の音声や動作が、その人を一層かりたてる)また社会生活における表現は、明らかに学習される性質を持った意図的な、時には計算ずくの行動であるからである。演技者には、一方ではきわめて冷静になりながら激しい表現を行なう人もあろう。しかしながらそれは、政治家の演説、講演者の話、誇張された世間話、リーダーの話し振り、セールスマンの説得と比べるならば、日常生活においても一般にみられる個人的な特徴や、場面的な特徴と、ある種の連続性を持ったものであるという考えを否定しえないのである。ナターセは、演技的な表現の基礎にある心理機構として、想像的場面に対応するかまへの成立をあげているが、聞き手(みる人)に感情的な伝達を可能にする表現の際のかまえが、通常の社会的場面においても重要な

意味をもつことが予想される。

筆者は、これまでに、言語表現する際の感情喚起作用を皮膚電気反射(GSR)によって追求してきた。その際、対象に対するコミュニケーションのかまえの有無が、GSRのあらわれ方に影響することを示してきた。これらの一連の実験に参加した人々は、文学部や経済学部等の学生であつて、想像的な場面におけるコミュニケーション事態には、特に慣れていない。そこで今回の実験では、ある程度情動的な内容を持った文章を読み上げることとを、演技者としての訓練を受けつつある人に行なってもらい、情動反応を一般の学生と比較検討してみることとしたのである。演技者としての訓練を受けつつある人を対象とするにあたり、桐朋学園演劇科で演技指導を担当する永曾信之氏の協力を得、演劇科二年の学生に、けいこの合い間、あるいは通常の授業の終わった後に、実験室に通つてもらふことにした。材料の選択にあたっては、あらかじめ、南、永曾、中村の三人が十分討論を重ね、数編の文章の中から、さらに適切と思われるものを選び使用した。

二 実験

(1) 目的

与えられた文章について言語表現する時、表現するとに職業的な訓練を受けている学生は、そうでない学生に比べて、情動反応について差異がみられるかどうかをGSRを指標として比較検討する。

(2) 方法

実験対象 演劇科学生群 桐朋学園短大演劇科二年学生、男女各六名。(実験時点において、この学年が最高学年であった。) 演劇科以外の学生群 男子、一橋大学三年南ゼミ参加者六名。女子、白梅学園短大心理技術科二年学生六名。実験中、測定上の問題からノイズが入るなど、データとして不適切なものは除外し、また演劇科以外の学生群の中で、特に高校時代演劇部に所属し、発声などに関し、工夫をした経験のあるもの、及び年齢の特に離れているものは、右の人数に加えなかった。

実験場所 一橋大学東校舎社会心理学実験室

装置 皮膚電気反射測定器及びボイス・キー、テープレコーダー

実験は、第Ⅰ実験と第Ⅱ実験とに分かれ、二つの実験は日を異にして、第Ⅰ実験の後に第Ⅱ実験を、同一の人物が受ける。二つの実験は、手続においてほとんど同じであるが、ただ材料のみ異なる。

実験材料 第Ⅰ実験、小説の一部(雑誌『世界』連載小説、井上靖「わだつみ」より) 第Ⅱ実験、戯曲の一部(男子—安部公房「おまえにも罪がある」より)(女子—岸田国士「驟雨」より)

手続 二群の各人に対して、同じ手続が用いられたので、一橋大学の学生の場合に例をとって説明する。

彼は、ゼミナールの時間に、実験に協力してくれるように頼まれた。彼はこれまでに、この様な実験をした経験が、ほとんどないので、何が始まるのか幾分興味がある。実験室に入ると、彼はテーブルの前の椅子に腰を掛けるように言われる。テーブルの上には、一枚の紙がふせて置いてある。実験者が、彼の左手をアルコールでふく。彼は、子供の時注射をして痛かったことを思い出すが、注射をするのではないと聞かされて安心する。今アルコールで手の脂をとったところに、GSR測定用の電極が装着される。別室にGSR測定器が置かれ、もう一

人の実験者が、彼の反応を測定している。彼は、実験者から次の様に言われる。

「これから、あなたに一つの文章を読んでもらいます。文は目の前にあるふせた紙に書いてあります。こちらで合図をしますから、そうしたら、その紙を手にとって声を出さないで、だまって読んで下さい。読み終わったら、元の通りにプリントを机の上にふせておいて下さい。こちらで合図をするまで、そのまま待っていて下さい。」

別室の実験者は、彼のGSRが十分落ち着くのを待って、合図を送る。彼の読んだ内容は、次の様なものであった。少し引用が長くなるが、全体を記載しておく。

きのうの夕方、近所の農家の若い嫁が夕食の支度の最中、ふいに家を出て、山伝いに吉奈部落の方へ歩いて行ったが、そのまま行方をくらましてしまったということであった。山伝いといっても、そこは吉奈部落へ通じている間道で繁くはないが、人の往来もあり、その行方をくらました若い女は、何人かの村人にその歩いて行く姿を見られていた。夕食の支度をしている最中のことではあり、その日は平生と少しも変わった様子はなく、近所の女たちとも機嫌よく話しており、家庭の内部にも、家出するような原因は全く考えることができないということであった。騒ぎになったの

はゆうべの夜半からで、今朝になってから、村人たちが何班かに分れて行方を捜索しているが、今のところはかいく手懸りは無いということであった。

桑一郎は神かくしという奇妙な事件にぶつかったのは二度目であった。この前は、小学校へ上がるか、上がらないの幼い頃のこと、近所の家の、これも若い嫁が突然行方をくまらずという事件が起き、それから一週間というもの、村人たちは毎日のように天城の山々を探し廻ったものであった。桑一郎は、その時の村中を覆いつくした異様な雰囲気、今でも覚えていた。部落の内儀さんたちは夕方になると、辻々に集まって、不安な面持で、捜索隊が山から帰って来るのを待った。「狐」とか「天狗」とか、「神かくし」とかという言葉が、大人たちの間でも、子供たちの間でも囁かれた。行方不明者は半月程経ってから天城トンネルの附近に佇んでいるところを発見された。衣服は破れ、髪はさんばらになり、はだしの足からは血がにじんでいた。彼女は精神に異常を呈していたので、失踪半ヶ月の間、いかなる場所でも、いかなる生活をしてきたか、全く聞くことはできなかつた。彼女はそれから数年廃人同様の生活をして、村に伝染病が流行した時、それに罹って死んだ。

桑一郎にとつては、こんどが二度目の神かくし事件であった。

彼は、若干の休憩を間にはさんで、以上の文章を何べんか読まされる。彼自身は、はっきり記憶していないが、

彼は同じものを全部で五回読んだのであり、その間の彼の GSR が記録され、一回毎の反応の変化が分かるように計画されている。五回目が終ると「では今度は、同じ文章を声を出して読んでもらいます。合図があったらプリントを手にとって、声を出して読んで下さい。そして終ったら、前と同じように机の上にふせて置いて下さい。」と実験者が言う。彼の前のテーブルには、読みあげる文章を書いた一枚の紙の他、二本のマイクが置いてある。一本はテープレコーダー用のマイクと、もう一本はボイス・キー用のマイクで、彼が声を出して読み始めると、GSR と共に、別室の測定器の一枚の記録紙に、声を出した時間が記録される。彼が同じようにして、休憩をはさみながら五回読み終ると、実験者から実験についてのいくつかの質問をうける。実験が終って、電極がはずされると、彼は適当な時にもう一度実験に協力してもらうように頼まれる。

第II実験、日をあらためて、もう一度実験室を訪れた彼は、室の様子が前とほとんど変わりがなく、前と同じような実験をするのだということがわかる。手続は第I実験とほとんど変わりなく、ただ、示された材料だけが

違っている。彼が読み始める第Ⅱ実験の材料は次のようなものである。

男 妙だな、鍵が外れているぞ……(首をかしげるが、すぐまた鼻歌になり、鞆を右手に持ちかえ、ドアを閉め、電気のスイッチをひねりながら、手をつかわずに靴をぬぐ。ふと、たたきの死体の靴を認め、鼻歌がやむ。振向いて死体を発見する。) 誰だろう……

(眉をひそめて、死体に近づくと) 酔っぱらいが部屋を間違えたのかな? もしもし……もしもし……(舌打ち) 弱っちゃうな……(荷物を机に置き、死体の肩に手をかけ、顔のぞき込もうとして、はじめて死体であることに気付く) : 死人だ!……(そろそろと後ずさり、玄関のたきまで行ったが)……いや待てよ……まさか、顔見知りの人間だとは思われないが、警察にとどける前に、一応たしかめておいた方がよさそうだ……(こわごわ引き返し、死体のそばに腹這いになって、その顔をのぞき込み) : 見たことがないこんな顔、たしかに見おぼえがない……おや、血じゃないか! (はね起きて) 殺人らしいぞこいつは!……とんでもないことになった! (こめかみの辺を両手でおさえ、不安そうにあたりを見まわす) : えらいものに、かかわり合いになってしまったな……しかし、絶対に赤の他人だ……どうころんでも、おれに疑いがかかるとは気がいらない。……そうだと、あるもんか……(ドアの方に行きかけて) しかし、それにしては、迷惑な話だな……(時計に目をやり) あと三

十分で、彼女がやって来るといふのに……むろん、おれに疑いがかかったりする気づかいはないにしても、ぶちこわしだよ。刑事やなんか、どこか乗り込んでくるわけだろ……いくら弁解したって、いざれ部屋の中をかきまわされたり、尋問されたりで……(間) : ふん、家宅捜索か……(見まわす) : そいつはちょっと、まじいんじゃないかな。彼女の見ている前で、あらいざらい、店をひろげさせられるのは……まじいよ、……絶対にまじい、……せめて、あれとあれだけでも警察にとどける前に、始末しておかなけりゃ……(あわてて机の方へ行きかけるが、ふと死体のそばで足をとめ) しかし、わけがわからんなあ、なんだからまた、選りに選って……(ぎくりと振り向き、おそるおそる、下手の「流し場」の方をのぞき込む。誰もいないようなので、ほっとする) : おれの部屋で、人殺しなんかをしでかしやがったんだらう? 偶然かな、それとも……(考えこみ) まったく理解に苦しむよ……そう、多分、警察だって理解に苦しむんじゃないかな……いったい、何ういうわけで……(間) : いやいかん! 警察が理解に苦しむというのは、あまりかんばしいことじゃないぞ……とりもなおさず、おれのほうに疑いがかかってくるわけだから……なるほど、おれの犯行だという証拠は上らないかも知れない。しかし、おれの犯行でないという証拠も、同じくらい上らないのだから……まじい、まじい、ぜんぜんまじい……どうやら、想像以上に、面倒なことにまき込まれたらし

いぞ……(間)……そうだ、アリバイがあればいいわけだ！
……(考えて)アリバイ……だが、アリバイを証明するた
めには、こいつの死亡時刻がわからなき駄目だな……(死
体に近づき、眺めまわす。それから、こわごわ死体の上衣
の袖をつまんで、腕をもち上げてみる。腕は、ぐにやりと
持ち上る。ぞっとして、とり落す)……ふん、死後硬直は
おきていないらしい……ええと、死後硬直が起きるのは、死
んでから何時間めくらいだったっけ？……まあ、いずれにし
ても、まだ死にたてに近いってことだろうな……畜生、ま
すます具合が悪いじゃないか！……仮に死んでから一時間
以内だとすると……(10)。

しかし、女性に対しては、次のような材料が示される。

恒子 それからもっとひどいことがあるの。昨夜なの、そ
れは……。——蒲郡って何県？って訊いたら——何県だと思
うって聞きかえすの。姉さま知ってらっしゃる？ 知らない
わねえ。だから、いい加減に三重県？って、ただ云って
みたの。そうしたら、笑いながら、——せいじゃ、どの辺に
あるか、日本の地図を書いて、円をつけて見ろって云うの。
あたし、そんな女学校の試験みたいなこと、いやだって云
ってやったの。そうしたら、紙と鉛筆を出して、どうし
ても書けなくてきかないの。しまいに、日本の地図も書けな
いのかって、そりゃ、しつっこく云うの。だから、あんま
り癪でしょう。日本の地図ぐらい書けますわって、そら、

よく書いたわね、あの通り書いてやったの。そうすると、
本州だけしか書かないうちに——なんだ、そりゃ胡瓜(きゅうり)かって
……(笑いながら泣き出す)胡瓜かって云ったわよ。

(また泣く)

あんな人のところへ、どうして嫁(よめ)く気になったか知ら……
デリカシイっていうものがちっともないの。(間)朝、顔
を洗う時、どういう風にするか知って……。(溜息)そ
れから、服を着る時……手を前後左右に振り廻すの……。
洋服を着るなら、洋服の着方ぐらい覚えればいいのに、そ
のざまったら、見ていられないの。

その気取らないところを気取ってるわけなの。わかる？
おれは気取ってなんかいないぞっていうところを見せるつ
もりなんですよ。それが、もう一種の気取りだっていう
ことを知らずにいるの。だから、すること云うことに、い
ちいちこだわりがあって、そばにいと、じれったくなる
の。ふんて云いたくなるの。

そうそう、式(しき)時(とき)だってわかるわ。どう、あの、なんでも
ないような風のしかたは……。さもこんなことは面倒臭い
っていうような様子をして、そのくせ、あれで、固くなっ
てるのよ。ほら、よくしらばくれた顔をするじゃないの。
あれが、てれかくしよ。——へえ、僕(ぼく)があんな女と結婚するん
ですか。へえ、僕(ぼく)が此(こ)のお酒(お酒)を飲むんですか。へえ、一緒
に旅行(りょこう)をするんですか。まるでそういう顔よ、あの顔は……
……第一、停車場(ていじやうば)へ行くまで、行先(ゆきさき)を決めないなんて、あ

んまり人を馬鹿にしてるわ。母さまなんか、随分気を揉んでいらしたわ。いくど母さまが訊いてもーさあ、まだ決めてありませんがね。まあ、行き当たりばったり、汽車の止った処へ降りるんですな。どこって別段見たい処があるじゃなし……。ハハハハ……。こうなんでしょう。母さまはむろんだけど、赤羽の伯父さまなんか、横を向いて苦い顔をしていらしたわ。それも気取りよ。無頓着振るのよ、却って可笑しいのに……。

黙読が終ると、実験者は「それでは、今度は、同じ文章を声を出して読んでもらいます。合図があったらプリントを手にとって、せりふのつもりで読んで下さい。そして終ったら前と同じように机の上にふせておいて下さい。」といい、ト書きの部分は読まなくてよい、といわれる。彼が読みやすいように、材料はト書きの部分に鉛筆で線を引いた紙と交換される。しかし、線を引いてあるだけなのでト書きにどういいうことが書いてあるかは、たやすく読みとることができない。もしも彼が、内面的な恥かしがりやの人間ならば、材料をせりふのようにして読みあげること、いくぶん抵抗を感じたであろう。演劇科学生についても、手続は同じである。

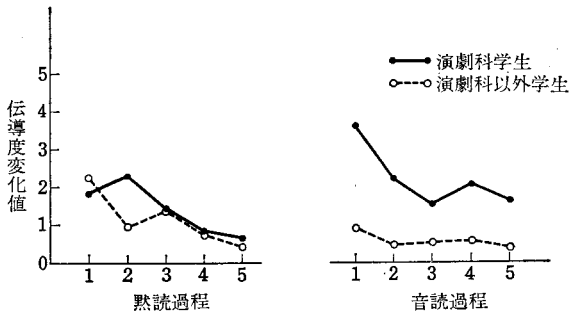
整理法

この種のデータの処理法については、いまだ定着した方法はないが、これまであらわれているもののうち、主なものを拾いあげると、一、反応数の比較、二、最大反応量の比較、三、基本抵抗値等の反応水準の比較、等になる。しかしながら、ここでは音読時間が一回二分以上に及ぶこと及び多峰性の反応が出現しやすいこと等を考慮し、試行時間中であらわれた反応のすべてについて、その大きさを、伝導度変化値によってあらわす方法をとった。この値を各試行毎に合計し一分間単位の反応量を算出し、これを各試行の反応量として代表させる。整理の際、G・S・Rの潜時を十分考慮に入れ、また約〇・五キロオーム以上の反応はすべてとりあげ、多峰性反応については議論もあるが、刺激の上から反応を区別するのは困難であるので、処理に関する統一的な基準を作り、まちがいの少ない方法を採用し、反応が頂点より約〇・五キロオーム以上もどったときには、その時点で一つの反応が終ったとみなした。結果の検討は反応量を中心として行なったが、その他反応数、基本抵抗値の変動等をも考慮に入れた。

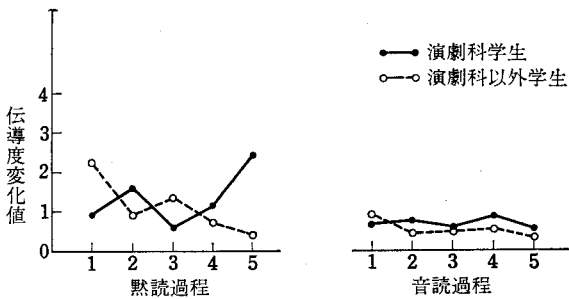
(3) 結果

(47) 言語表現過程における情動反応

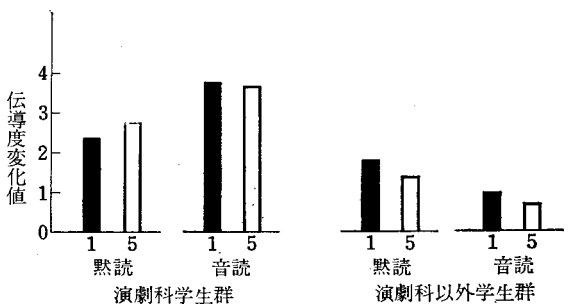
第1図 第I実験男子の反応量(中央値)



第2図 第I実験女子の反応量(中央値)



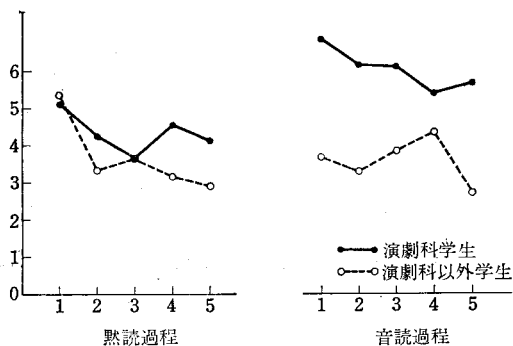
第3図 第I実験男女の第1試行と第5試行の平均反応量



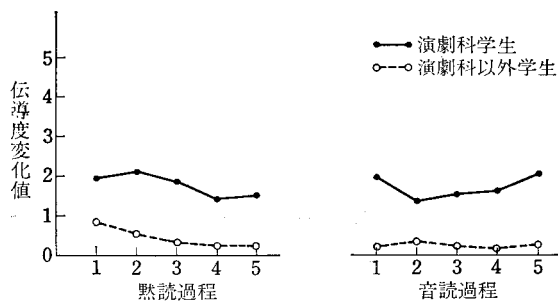
共分散分析及び分散分析により検定を行なった。
 第I実験 五試行の平均反応量において両群を比較すると、男子に於ては有意差が認められ、音読過程では演劇科学生の方が反応量の多いことが、明らかにになった。第1図は、第I実験の両群(各六人)の単位反応量を示したものである。女子に於ては両群の平均反応量に有意差

は認められなかった。(第2図)次に、第一試行と第五試行の反応量を比較し、順応または漸増の傾向が認められるかどうかを調べると、演劇科以外の学生では、黙読過程において、男子・女子ともに、第五試行の反応量の方が第一試行の反応量よりも減少することが認められた。また、音読過程においても、第一試行の反応量は、第五

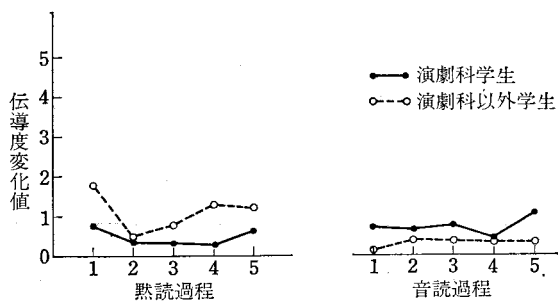
第4図 第I実験男子の平均反応数



第5図 第II実験男子の反応量(中央値)



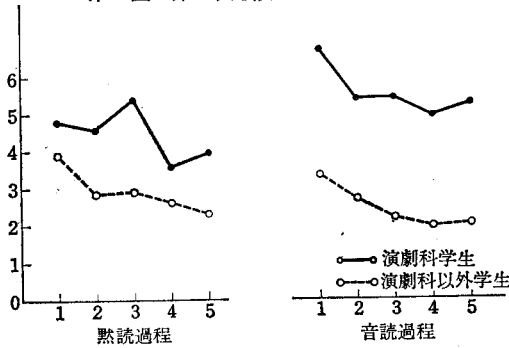
第6図 第II実験女子の反応量(中央値)



試行の反応量に比べて多いことが明らかになった。一方、演劇科の学生にあっては、このような順応傾向は認められなかった。(第3図) 反応数についてみると、演劇科男子では、黙読に比べ、音読の反応数が多い。演劇科以外の学生にあっては、このようなことは認められなかった。(第4図)

第II実験 平均反応量を比較すると、男子・女子ともに、両群間に差が認められる。(第5図・第6図) 男子では、すでに黙読過程において差が認められ、演劇科学生の方が、それ以外の学生より反応数が多い。また、音読過程では、演劇科群の方が反応数の多い傾向がみられる。演劇科以外の学生にあっては、音読過程の単位反応量が、

第7図 第II実験男子の平均反応数



群間に両過程で差が認められ、演劇科学生の方が反応数の多いことが示された。(第7図) GSRの基本抵抗値は賦活水準と密接な関連があるとされている。一般に基本抵抗値は実験開始の直前直後とで最も変化するやすく、また、音読の開始前の教

黙読過程に比べ、逆に減少している。女子においても、両群間に差が認められ、演劇科学生の音読過程の反応数が多い。また、第一試行と第五試行の比較では、両群ともに有意差がみられなかった。ただし、演劇科以外の学生(男子)の黙読過程では、第五試行の方が反応の減少する傾向がみられる。反応数についてみると、男子では両

群間に両過程で差が認められ、演劇科学生の方が反応数の多いことが示された。(第7図) GSRの基本抵抗値は賦活水準と密接な関連があるとされている。一般に基本抵抗値は実験開始の直前直後とで最も変化するやすく、また、音読の開始前の教
示で、急速に減少する場合がある。一方、黙読の途中では、徐々に上昇する傾向のみられることが多い。
GSRが最もあらわれやすい箇所を音読についてみると、まず、読み始めに大きな反応を示しやすく、また、読み終わったあとにもあらわれやすい。内容との関連においてみると、第I実験の場合、女子に例をとると、「夕食の仕度……」「騒ぎになったのは夕べの夜半からで……」「神かくし……」「はだしの足からは血がにじんで……」等の部分に、反応を生じやすい。第II実験の男子では、「死人だ!……」「とんでもないことになった!……」「まずい、まずい……」「死後硬直はおきて……」等の部分に、反応があらわれやすく、女子では、「胡瓜かっていったわよ……」「あんな人のところへ……」「へえ僕があんな女と……」「あんまり人を馬鹿にしてるわ……」等の部分である。質問の結果についてみると、第I実験では、それまでにこの小説を読んだことのある人は、一人もいなかった。第II実験では、演劇科男子学生が、前にその戯曲の一部を、一度だけみたことがあり、女子学生では、前に読んだことのある人は、一人もいなかった。一方、演劇科以外の学生では、男子は誰も読んだこと、聞いた

ことがなく、女子では、テレビで前にこの劇をみたことを思い出した人が、二名あった。また、文章の内容についての関心の有無は、両群間に特に差異が認められなかった。第II実験において、何回めが最もうまくできたと思うかという質問への回答のうち、はっきり答えた人のみについてみると、演劇科学生の三分の二は、自分のGSRの最も多い試行を、うまく読めたと指摘した。これに対し、演劇科以外の学生についてみると、本人がうまく読めたと考えた試行の平均反応量は、むしろ少なく、GSRと一致しない傾向がみられた。

(4) 考察

演劇科学生の方が、一般に音読の反応量の多いことは、その場面のあらわす感情を表現するのにより成功していることと関連しているとみなしてよいであろう。ただし、第I実験の女子では群差が認められなかった。演劇科以外の学生では、女子の方が男子より上手に読む人が多く、そのため、小説という材料では両群間に差が認められなかったと考えられる。一方、第II実験の男子では、黙読過程にすでに差が認められる。これは、男子の材料が女子の材料と異なり、ト書きが比較的多く、そのため、ト

書きを黙読する時に、演劇科学生の反応が活発にあらわれるためではないかと推測される。

GSRの大きさに及ぼす影響のうち、測定条件に関するものを除けば、この実験について、特に次の事項を指摘することができよう。(一)、文章の内容に対する関心の程度。(二)、上手に表現しよう(その場面の感情を出そう)、あるいは、その人になりきろうとするかまえ。(三)、そのかまえが形成され表現されるのを一方で抑制するものの強さ。(四)、表現することへの興味、及び意欲。(五)、その時の身体の調子。(六)、その他の生理的・心理的要因。

(一)、関心のある文章及びその部分の黙読は、反応をひき起す要因となると考えられる。一例をあげると、第I実験では、演劇科の男子学生の一人が、都市と農村の問題に関連して、農村から人が蒸発していく現象に特に関心をもっていたので、神かくしに関する部分を黙読する時と、このことについてインタビューの中でふれられた時、大きなGSRが生じた。実験終了後、彼がこの種の事件に社会的関心をもっていることが確認された。

(二)、人に伝えようとする、あるいは上手に表現しようとする、そのようなかまえがみられないか、または、ほ

とんどみられない時には、音読しても、GSRはあまりあらわれない。また、演劇科学生にあっては、ふだん訓練を受けた表現法のみに従い、ほとんど自動的に読みあげ、頭の中では他のことを考えているという場合には、GSRはあまり活発にあらわれない。このようなケースは、堂々と読みあげられるが、同時に、突然意味の通じないような読み違いを行ない、それに気付かない等の事実から裏付けることができた。

(三)、感情を表現しようとするが、一方でそれをおさえるようにする力が働くのは、演劇科以外の学生の場合に多く、特にせりふでは、一方でその人物に入りかけながら、またそこから出てしまおうとする動揺した状態が推測され、この現象は、しばしば恥かしさとして自覚される。恥かしさが特に強く感じられる時には、内容のあらわす情動よりも、そのことによってGSRをひき起すことになろう。せりふの場合の自己評価とGSRの大きさの一致度の群差は、判断の基準の違いや、自己評価の優劣によって生ずるばかりでなく、特に演劇科以外の学生のGSRには、いろいろな性質の反応が混入しやすいことを示していると考えられる。

(四)、演劇科の学生が、表現することに強い興味と意欲をもっていることは当然であるが、演劇科以外の学生においても、読むことの好きな人は、音読の際の反応量が黙読に比べて高い例がある。このような人は、そのグループ内では、表現が上手な方でもある。演劇科学生では、最後まで表現の意欲をもち続けるが、演劇科以外の学生には、最初は努力するが、次第にあきらめるか、または、あきらめてしまう人がいる。これは、読むごとに新たにつけ加わる変化が少ないためと、思うように表現できないことから、イメージとして抱いていたものを、表現過程で逆に破壊してしまうことがあるためである。このようなことが重なり、演劇科以外の学生では、反応の順応傾向が生ずると考えられる。イメージと自分の表現したもののとの隔りによって生ずるもどかしさは、演劇科学生によって報告されることもあり、そのような場合には、GSRの出現も比較的少ない。

演劇科学生が途中で読み方をかえたり、新しいみかたをしたりする例は多い。演劇科のある男子学生はインタビューで次のように報告した。「黙読した時最初バツと読んで、それで何回か、四回読んだでしょ、全部で黙読

を五回ですか。最後の時、何か面白いことが考えつきそうだなと思ったら終っちゃったことが残念だったみたい
な、あと二、三回黙読しなかったかな。」(第I実験)

内容について新しい発見をしたために、かえって、そのときの感情を体験するのに時間を要することがあり、音読の途中で、大変苦しんでしまうケースもあった。このような場合には、例外的に時間が長くかかり、そのため単位反応量は小さくなるが、それでも演劇科以外の学生の平均反応水準よりも高くなった。

六人の中には含まれていないが、高校時代演劇を勉強したある一橋大の学生の場合には小説を音読するとき、他の学生よりも反応量が多く、演劇科群に近い反応傾向を示した。

(四)、実験は大部分午後または夜間に行なったが、ときには演劇科学生の都合により休日の午前中に実施した例があり、午後に比べて、声の調子がよくないなどの例もあった。一般に、身体が疲労しているときなどは、実験中基本抵抗値の上昇する傾向がみられる。

(六)、実験室における社会的条件が、GSRの出現に影響を与えることが考えられる。また一般にGSRの伝導

度変化値は、大変個人差が大きく、現在までのところ、この大きさ及び変動と、個人のパーソナリティーとの間に明確な具体的関係をつかみえていない。実験の結果はこれに関する示唆的なデータを含んでいるので、今後さらに検討を加えたい。

以上考察してきた対象は、演劇科学生とは云え、訓練を受け始めてから、一年数ヶ月の学生である。さらに学習度を深めた時、どのような結果があらわれるかは、この結果からただちに推測しがたいものがある。とくに長年、職業的活動にたずさわっている俳優等に関してはここで考察した結果とは別の結果があらわれる可能性もある。すでにこの実験においても表現が型にはまって上手であれば必ずGSRが生ずるとは限らないことが示されている。またその人物になりきろうとして、ある程度それに成功した場合、表現が下手であっても例外的にGSRのふえることがある。

また同じ材料でも十分けいこをつんだ仕上げの段階に至れば、異なった結果が生じうると思われる。またナターゼも指摘しているようなコメディアンとそうでない俳優との違い(これは一般的なパーソナリティーの問題と

直接関係する)や、表現に関する各人の特徴の問題など、ここではいまだ扱うことのできない性質のものが多く、これらは将来の課題として残ることになる。

三 要約と結論

言語表現するときにあらわれる情動反応の大きさは、GSRを指標としたとき、コミュニケーションのかまへの有無に関係している。演技を学習している学生は想定された場面における言語表現になれており、そのためこのような言語表現の際の情動反応が一般に大きく、同じことをくりかえしても順応しにくいと考えられる。そこで表現することに職業的な訓練を受けつつある演劇科の学生と演劇科以外の学生とに、与えられた文章(小説と戯曲)を読みあげてもらい、両群のGSRを比較検討した。

その結果小説を読む時、男子では演劇科群の方が音読のGSRが大きく、戯曲では男女双方に群差が認められた。一方第一試行と第五試行の反応を比較すると、小説を読む時演劇科以外の学生はくりかえし読むうちに反応量が減少するが、演劇科群ではこのようなことが認めら

れなかった。演劇科群の反応量の多いことは、この群の学生が与えられた場面の感情を体験し、これをよりよく表現しようためと考えられる。また一方演劇科以外の群で反応の順応傾向がみられるのは、途中で新しい工夫や発見をすることが少なく、しばしば興味を失うためと考えられる。

実験の結果は実験前に予想した方向にあらわれ、多くの実験仮説を実証した。

(1) C. Darwin. The expression of the emotions in man and animals. 1904. London: John Murray.

(2) R. E. Miller, W. F. Cautel & I. A. Minsky. Communication of affects between feral and socially isolated monkeys. *J. Person. soc. Psychol.*, 1967, 7: 3, 231—239. によれば、野生のサルと隔離して育てたサルとに回避反応を条件づけると、条件反応の獲得には差異がないにもかかわらず、伝達サル(表情で他のサルにショックがせまるのを伝える役割のサル)と、反応サル(ショックのおとずれを知ってショックがこないようにバーを押す役割のサル)とを閉回路テレビで結びつける感情伝達テストでは、隔離サルの成績が悪く、相手のサルの表情に反応することも、自分の感情が他のサルに伝わる表情伝達の面でも、いずれも欠陥のあることが見出されたという。

- (3) W. James. *Psychology*. Briefser course. 1892, 1923. New York: Henry-Holt & Co. の影響を受けたシムズは情動的状态が、本能的反応と分かちがたうことを認めながら、情動を身体反応の強弱の点で、粗大情動(怒り・喜び・悲しみ等)と繊細情動(道德的・知的・美的感情)とに分類し、粗大情動について自然な考えとして、いわゆる感情の末梢起源説を提出した。これによると事実の認知のすぐあとに身体反応が生じ、それに対する感じが情動であるといふ。
- (4) M. P. Bishop, S. T. Elder & R. G. Heath. Attempted control of operant behavior in man with intracranial self-stimulation. In R. G. Heath, (ed.), *Roll of pleasure in behavior*. 1964. New York: Hoeber. p. は、患者がペニーを押すと脳に微弱な電流が通じ、快感がひきおこされる。この患者は電流がもっと強化を受けなくないことも長く間押し続けた。
- (5) 飯沼 B. B. Суворова. Изменение активности медленных ритмов в ЭЭГ как показатель дискомфорта состояния. Вопросы психологии. 1966. 2, 75—82.
- (6) トンズマンの条件反応研究はトーンリナーヤー研究の面における生理心理的方法の適用である。
- (7) S. Lazarus, M. Tomita, E. Opton, Jr., & M. Kodama. A cross cultural study of stress-reaction patterns in Japan. *J. Person. soc. Psychol.*, 1966. 4: 6, 622—633 では見ている人にストレスをひきおこすような映画を映写し、そのときの GSR を日本人とアメリカ人について比較している。
- (8) R. Natadze. On the psychological nature of stage impersonation. *Brit. J. Psychol.*, 1962, 53: 4, 421—429 参照。日本においては愛育研究所の星氏によってテレマタレント養成研修生に類似の重量錯覚実験を行なったが、この場合はテスト時点における生徒の成績と重量錯覚との間に高い相関は見出されなかった。
- (9) 井上靖「わたひみ」『世界』一九六七年六月号。
- (10) 安部公房「おちえにも罪がある」一九六五年 学習研究社。
- (11) 岸田国士「驟雨」岸田国士全集第一巻 一九五四年。
- (12) 一般に潜時は一—二秒と短かすぎるが P. H. Venables & I. Martin, (ed.), *Manual of psycho-physiological method*. 1967. North-Holland. p. 431・432—433・434 参照。
- (13) V. Biase & M. Zuckerman. Sex differences in stress responses to total and partial sensory deprivation. *Psychosomat. Med.* 1967, 376—390 p. 431 キロキ—434 以上の反応を数えている。
- (14) 飯沼 R. Edelberg. Electrical properties of the skin. In C. C. Brown, (ed.), *Method in psychophys-*

(55) 言語表現過程における情動反応

ology. 1967. Baltimore: Williams & Wilkins. 参照。
(5) 香嶺・柳屋泰之助のR-Rの関係をめぐって。Y. Niimi.
The studies on electrical skin conductance and gal-

vanic skin reflex by exosomatic method. (Part 1). 1967.
参考参照。

(一橋大学専任講師)